

第5学年 社会科 What image is your country?

教育学研究科科学文化教育専攻社会認識教育学専修 庄本恵子

1 はじめに

本実践に参加するのは、昨年度に引き続いて二度目となる。昨年、初めて本実践に参加した私は、見るものすべてに驚かされた。アメリカの教育の現場を実際に自分の目で見ることは、教師を目指す私にとってまたとない機会であったといえる。まずミドルスクールを訪問した私は、アメリカの子どもたちの日本への興味関心の高さに驚いた。確かに日本の子どもたちも、海外の人が訪問してくると様々な質問をしたり、一緒に遊ぼうとしたり、積極的にコミュニケーションを取ろうとする場面が多く見られる。アメリカの子どもたちも日本の子どもたちも、同じように“海外”“他国”という自分の知らない世界に対して、興味関心を持つことを実感したのである。しかし同時に、今まで抱いてきたアメリカという国のイメージが一方的な見方であった事に気付かされた。もちろん、これまでアメリカという国について学ぶ機会があったが、それはあくまで産業や歴史的背景から、日本という国に住む私たちが描くアメリカ像であったのである。そのことに気付かされた私は、もう一度アメリカに行き、アメリカの子どもたちが描くアメリカ像について知りたくなった。そこで、昨年に引き続き本実践に参加しようと考えたのである。

2 現地研究の日程と概要

月日	曜日	交通等	訪問地・用務等	泊
9月17日	土		広島ー成田 0745ー0925 NHー3112 成田ーワシントン 1105ー1040 NHー2 ワシントンーローリー 1235ー1340 NHー7144	米国ノースカロライナ州 Greenville City Hotel&Bistro 203W.Greenville Blvd, Greenville,NC27834 TEL:877-271-2616
9月18日	日		(午前) 事前準備 (午後) 各学校担当者(Mrs.Watson)との打ち合わせ	Greenville 同上
9月19日	月		ElmhurstE.S(K5)訪問 授業クラス担任(Ms.Maxwell)との授業実践の打ち合わせ 授業観察	Greenville 同上
9月20日	火		(午前) ElmhurstE.S(K5)訪問 授業実践	Greenville 同上

			(午後) イーストカロライナ大学訪問 昼食・施設見学	
9月21日	水		St. Peter's Catholic School 訪問 学校・授業見学	Clarion State Capital 302 Hillsborough St. Raleigh, NC TEL:919-832-0501
9月22日	木		(午前) Exploris M.S. 訪問 学校・授業見学 (午後) 博物館見学	Raleigh 同上
9月23日	金	ローリー →ワシントン 1025-1130 NH-7145 地下鉄等	ワシントン訪問 アメリカの文化見学	Washington Plaza 10 Thomas Circle, N.W. Washington, DC 20005 TEL:202-842-1300 808-424-1140 Washington DC
9月24日	土		ワシントン訪問 アメリカの文化・歴史見学 (スミソニアン博物館等)	Washington DC 同上
9月25日 9月26日	日 月	ワシントン-成田 1220-1525 NH-1 成田-広島 1750-1925 NH-3129		

3 現地研究授業

3.1 単元等名

第5学年 社会科 “What image is your country?”

3.2 事前準備

本実践では「互いのことを理解する」ための入り口の授業として、お互いの国のイメージを知ることを授業のねらいとした。近年、盛んに「国際理解」「多文化理解」といった言葉が学校教育の中で唱えられ、グローバル社会に対応できる子どもを育てる教育が求められているといえよう。日本の学校教育では、海外の人とのコミュニケーションにおいて必要とされる語学力の向上のために、英語を母国語とする海外の教員をティーチングアシスタントに配置している学校が多く見られる。しかしながら、ティーチングアシスタントには、正しい言語を教えるだけでなく、言語というコミュニケーションのツールの習得を通じて、その国の文化に触れさせ

るねらいもあるのではないだろうか。つまり、子どもたちにグローバル社会で生きるための「国際理解」学習を行うのであれば、より子どもたち自身が、他の国の文化を知り、学び、体験し「互いの理解を深める」活動を行っていくことが求められよう。

そのため、教材として日本に住む子どもたち（中学生）に“アメリカのイメージ”を書いてもらった。そのイメージをアメリカの子どもたちに見せることで、日本の子どもたちがアメリカという国をどのように認識しているかを知ることが出来るからである。この教材は、自分たちが思ってもいなかった自国像や他国像を認識することが可能になるであろう。また、アメリカの子どもたちに“日本のイメージ”を描いてもらうことで、互いの国の今まで知らなかった一面を知ることが出来る。ゆえに、様々な視点から他国を知り、自分の目を見て、聞いて、実際に話して理解することの大切さを実感できる、言い換えれば子どもたち同士が、子どもたちの目線で「国際理解」を行う事ができる教材になると考えたのである。

3.3 学習指導案

Lesson Title: “What image is your country?”

Lesson Author: Keiko Shomoto

Date: September 2011

Grade levels: 5th

Subject: Culture

Description:

In this class, students will know image that children in Japan have in the United States. And, they will notice the image of the United States that the American holds and the image of the United States that the Japanese holds are different. I want them to do to the chance to think about their countries again and to learn only to see one of other countries.

Objectives: As the result of this activity, students will be able to

1. Think about their countries again.
2. Learn only to see one of other countries.

Materials, resources and Technology:

Image that children in Japan have in the United States & Japan, Paper, Pen

Procedure

Activity	Teacher's activity	Materials
1. Think about the image of the United State. (Write)	1. Tell today's activity: Think the image of other countries.	
2. Show the image that children in Japan have in the United States.	2. Explain the image of the United States that the Japanese children hold. 3. Explain whether the image that holds same the United States is different.	Image that children in Japan have in the United States

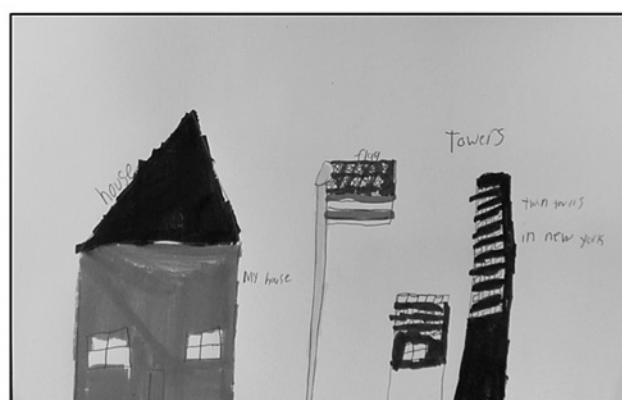
3. Write the image of Japan.	4. Let them write the image of Japan.	
4. Show the image that children in Japan have in Japan.	5. Introduce the image that children in Japan have in the Japan.	Image that children in Japan have in the Japan
5. Write down this lesson's impression on paper.	6. Let them write down this lesson's impression on paper and talk about my impression to the class.	

3.4 授業の実際

授業を始める前に、クラス担任の教師が日本について簡単なVTRを生徒たちに見せていた。それを踏まえ、授業の初めに日本という国に興味を抱かせるために、「こんにちは」などの簡単な日本語の挨拶を教えた。クラスの雰囲気が落ち着いたところで、自国（アメリカ）のイメージを絵か文字で紙に描かせた。生徒たちは非常に熱心に取り組み、自分がイメージしているものが正確に思い出せない時には、積極的に質問をしてきた。また、自分が描いたものをぜひ見て欲しいという生徒も多くいた。実際にアメリカの生徒が描いたアメリカのイメージが下の絵である。この生徒は自分の家、国旗、ツインタワーを自国のイメージとして描いていた。その後、事前に用意していた教材である、日本の生徒（中学校2年生）が描いたアメリカのイメージを紹介した。生徒たちにクイズ形式で、「日本の子どもたちに同じことを聞いてみたらどんなイメージを書いたと思う？」と問うたところ、オバマ大統領や星条旗、ホワイトハウス、自由の女神など、アメリカで有名な人物や建物が挙げられた。そこで、日本の生徒が実際に描いたアメリカのイメージを、カテゴリーごとにまとめたものを見せたところ、食べ物やスポーツ、音楽など様々な視点からのイメージがあることに驚いていた。最後に、生徒たちに日本のイメージを紙に描かせた。ここで授業の終了時間となったため、日本の子どもたちが描く日本のイメージを少しだけ紹介して、授業を終えた。そのため、生徒たちに自分が描いた日本のイメージを発表させる時間をとることができなかった。



(日本の生徒が描いたアメリカのイメージ)



(アメリカの生徒が描いた日本のイメージ)

3.5 考察

本実践で得られた成果は大きく2つ挙げられる。1つ目は「新たな他国の一面を見せることができる」教材を開発できたことである。授業者が予想した以上に、互いの国のイメージには大きな違いがあったため、生徒にこれまで知らなかった他の国の一面を見せることができた。具体的には、日本の生徒が描いたアメリカのイメージで多かったものはオバマ大統領、野球（Baseball）、英語（English）であったのに対し、アメリカの多くの生徒が描いたのは、ニューヨークのツインタワーと国旗（星条旗）であった。アメリカの生徒はツインタワーを描く生徒がいなかったことに驚き、英語をイメージすることに驚いている様子であった。よって、本実践は「新たな他国の一面を見せることができる」教材であったとともに、本実践で生徒が描いたイメージが今後互いの国を理解していく入口の教材となる可能性を持つという点で成果があったといえよう。2つ目は、互いの国への興味・関心を高めることができたことである。授業中、授業後に、生徒は様々な日本への質問を教師に問いかけてきた。これは、生徒たちがイメージを膨らませる中で、今まであやふやだった日本のイメージをより鮮明に描きたい、そのためにも日本についてもっと知りたいと感じさせることが出来たのだと推測することが出来る。

課題は以下の2点である。まず、本実践を行う直前に、アメリカの連携校教員が日本について簡単な紹介VTRを見せていたため、生徒たちの日本のイメージがそのVTRの内容に偏ってしまった点である。事前に生徒が日本について少しでもイメージを持てるようにとの配慮であったが、授業者は「学校で日本について何も学んでいない生徒」を想定していたため、イメージの結果に偏りが生まれてしまったことが課題であった。2つ目は、今後この内容をいかに日本の生徒に伝えていくかである。本実践は、あくまで「互いのことを理解する」ための出発点となる授業であったので、今後どのような授業を日本とアメリカ両校で行うかが課題であろう。

4 体験型教育実地研究における自己の変容

4.1 教育観の変容

アメリカの学校教育の現状を見て特に印象に残ったのは、「個を尊重する」教育観を重んじるという点である。私は中学校での実習経験を積んできたが、その中で大切にしてきたことは「個を集団の中で活かす」という教育観であった。それぞれの子どもの個性を、教師が授業の中でどのように活かしていくかということは、日本のように一斉授業を行う際に極めて重要な部分である。しかしながら、アメリカの学校では、同じ教室の中で授業を受けてはいるものの、自分の学力に合わせた課題が設定されており、各自がその課題に取り組む形式の授業形態が多く見られた。このような授業を実施するためには、ティーチングアシスタントの存在が非常に大きい。教師たちは、それぞれの子どもの苦手や得意を把握し、ティーチングアシスタントと一緒に、それぞれの子どもにどのような課題を設定することが望ましいかを考えるのである。これまで私が日本の学校教育の中で抱いてきた教育観は、「個を集団の中で活かす」というものであり、もちろん「個を尊重する」ことも大切ではあるが、それは授業をクラスの子どもたち全員と作りたいという思いに裏付けされた教育観であったことに気付かされた。

4.2 自分自身の変容

昨年度に比べてアメリカの授業の様子についてある程度わかっていたため、教員や生徒と積極的にコミュニケーションをとることができたように感じる。その中で感じた自己の変容は、自分が感じていること思っている事を相手に伝える努力をするようになったことである。アメリカの教員や生徒と会話をしていると、ポジティブな言葉やほめ言葉がたくさん出てくる。そして、彼らはそのような言葉かけに対して、素直にうれしい気持ちを表現していた。悲しいときにはそれを包み隠さず表現し、もちろん苛立っている様子も隠す気配はない。私は、自分の思っていることや感じている事よりも、相手がどう思うのか、という感情が先に立ってしまい、自身の感情を押さえてしまう事が多くあった。日本という国の中で、同じ文化で生活し、同じ日本語を話す人たちと会話をしていると、自然とその場の空気を読み、表情や仕草などからもコミュニケーションをとることができるからであろう。しかし、言葉やその背景にある文化が違えば、会話の際の雰囲気を読むことすらままならない。そのため、自分の気持ちを素直に言葉で表現することが大切であることを実感させられた。相手に自分の気持ちを言葉で伝えるコミュニケーションは、日本に帰ってからも続いている。同じ日本人といっても、自分の伝えたいことは、しっかりと言葉と表情で伝えるようになった。また、相手の気持ちを理解しようとする態度を積極的に見せるようにもなった。学校で生徒と接する際にも、気持ちを理解しようとする意思をしっかりと伝えることで、生徒は安心して話をしてくれるように感じている。

4.3 グローバルマインドに関する変容

本実践の中で、子どもが自国や他国に対して持つイメージが非常に多様であることがわかった。もちろん、同じアメリカに住む子どもの中でも、自分達の住むアメリカのイメージと聞いて思い描くものは様々であった。しかしながら、その多様なイメージの中に、描いた子どもの文化的、歴史的背景とアメリカという国の文化的、歴史的背景が表れており、私自身が抱いていたアメリカのイメージも変容していったのである。中から見る景色と外から見る景色が違うように、国の様子もそこに住む人々と住んでいない人々とでは受け止め方が異なっている。今までは、自分が日本の国から見た世界の様子を土台とするグローバルマインドを持っていたが、本実践を通して、相手の国から見た世界の様子も踏まえたグローバルマインドを持つ必要があることに気付かされた。

5 おわりに

先生方の細やかな指導と他の参加者の協力のおかげで、無事二度目の実践を終えることができました。本実践は、授業の開発・実践という教師として自分の能力を成長させてくれただけでなく、その他の面でも自分を成長させてくれたと思います。

最後になりましたが、本実践を計画実施して下さった GPSC の関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。